

令和6年度 第2回恵庭市学力・体力向上推進会議 会議録

〔開催日時〕 令和6年10月24日（木）10：00～11：30

〔開催場所〕 恵庭市民会館 1階 第1会議室

〔出席者（敬称略・順不同）〕

委員／佐々木 保 （有識者）

村越 含博 （北海道文教大学）

高橋 和子 （恵庭市PTA連合会）

吉田 かおり （恵庭市校長会）

山口 広宣 （恵庭市教頭会）

北 幸法 （学力向上アドバイザー）

平井 梓 （恵庭市社会教育委員）

河内 紀彦 （北海道ハイテクACアカデミー）

事務局／教育長、教育部長、教育部次長、教育総務課長、教育総務課主幹、教育総務課主査・
スタッフ

〔内 容〕

1. 開会
2. 委員長挨拶（委員長）
3. 教育長挨拶（教育長）
4. 議事

1) 学力・体力向上の取組について

事務局より、配付資料について説明した後、前回会議後に各委員より集約した取り組みに対する意見（資料1 令和6年度 学力体力向上に係る取組）の内容について次のとおり説明。
質問については各担当主査より回答。

① 全国学力学習状況調査の結果について

事務局：小学校で国語と算数、中学校では国語と数学のそれぞれ2教科ずつテストを実施したほか、生活習慣や学習環境等に関する質問調査を実施。

全国平均との比較に関しては、小学校の算数でやや下回り、その他はほぼ同程度となっている。全道平均も全教科でほぼ同程度である。

昨年度と比較しても、小学校では算数の方が引き続き全国平均よりも下回っているが、中学校の数学では下回っていたものがほぼ同程度と改善が見られる。全道平均との比較では、中学校で国語が昨年度やや上回っていたが、今年度は同程度になっている。

こちらは速報版ということで、現在、市のホームページでも公表している。

この後、教科ごとの結果や、質問紙の結果も含め報告書を作成する予定となっており、完成次第皆様にお示しさせていただく。

② 学力向上の集約した意見について

事務局：標準学力検査（NRT）及び英検 IBA、ESG の実施について、こちらは実施の継続及び NRT の強化を追加することのほか、英検 IBA の取組み、ALT にも触れた意見もいただいている。

ALT の配置及び外国語指導に関わる地域人材の活用について、こちらは英語教育における ALT の重要性や質の高い ALT の確保、地域人材から ALT の移行といった意見をいただいている。意見の中で、質問があった点を担当より回答する。

担当主査：外国語指導に係る地域人材の確保に関わる他の自治体での取組みについて、近隣自治体に確認をしたところ、地域人材という形で授業を展開している自治体は恵庭市のみであった。ただし、英語のボランティアを取り入れている自治体は他にもあり、人材バンク等の活用、過去に英語を指導されていた方に直接アプローチをしているというような実態があるとの回答であった。

地域人材から ALT への移行も検討していただきたいという意見もあったが、今のところ一定程度の地域人材の方が授業に入っており、現段階では早急な移行は考えていないものの、こちらの意見も今後参考にさせていただく。

事務局：教職員への研修について、こちらは不登校対策や指導方法、情報モラルといった具体的な研修内容の意見のほか、研修方法の検討や普段からの教員間の連携について意見をいただいた。

ICT 教育の充実について、こちらはタブレットの効果的な活用に期待するご意見、デジタルドリルの有効活用に関わるご意見のほか、タブレット活用に関わる課題に関する意見をいただいた。

学習支援員等の配置について、こちらは学習支援員の拡充に関するご意見、教科担任制、ICT 支援員を含めた指導体制の充実を期待される意見をいただいた。

地域による学習指導について、こちらは学校運営協議会の効果的な活用に関わる意見のほか、地域との連携を進める方策に関わる意見、文教大学との連携に関する意見をいただいた。

③ 体力向上の集約した意見について

事務局：体育授業への支援について、こちらは支援による効果を期待される意見のほか、派遣指導の目的に関する意見や小学校の体育専科教員を希望する意見をいただいた。

意見の中で、質問があった点を担当より回答する。

担当主査：体育授業支援の具体的な成果に係る質問だが、毎年春先の運動会前シーズンに、児童への走り方指導等を行うことによる児童の記録向上、それに伴う教員の指導力向上が挙げられる。これらを毎年継続的に行うことで、より効果を発揮するものと考えられるため、今後も継続して実施したいと考えている。

併せて、中学校の体育授業支援を現在施行で3回実施している状況だが、次年度以降の実施方法については現在検討中である。

事務局（担当主査）：次に小学校水泳授業における民間プール施設の活用について、こちらはプール施設や指導者の民間活用に肯定的な意見をいただいたほか、プール施設の老朽化への対応や支援、温水プール設置に関わる質問をいただいている。こちらの質問について私の方から回答させていただく。

1点目、民間プールではなく市運営の温水プールの計画は難しいのかという質問について、プール施設を所管している市長部局の健康スポーツ課から公表されている計画等においては、少なくとも現状では新たな市民プールの設置について予定されておらず、現在の市民プールをそのまま存続させていく方針となっている。また、市民プールの一部統廃合に関わる措置として、現在開設しているプールが5校、今年度に関しては4校となっているが、そちらへの移送バス運行や、千歳市の市民温水プールの利用料金を恵庭市民でも千歳市民と同じ料金で利用できるようにするといった試行事業を実施している。但し、これらの取組は授業を除く一般開放を対象としている。

2点目、将来的に全校のプール授業を民間で実施するのか、また、老朽化したプールの更新も視野にあるのかという質問について、現状では廃止が決定した3校（柏小、松恵小、恵み野小）を除く5校のプールは、維持補修に努め、継続する予定となっている。

老朽化したプール施設の更新に関しては、現時点で島松小学校に設置されているプールが老朽化に伴い更新する方向で進められていることから、存続する他のプールでも維持補修に限界が生じた際には、更新することも選択肢にあると考えている。

続いて、部活動指導員の配置について、こちらは部活動指導員の役割に関する意見や文化部における活用に関する意見をいただいている。

意見の中で、質問があった点を担当より回答する。

担当主査：部活動指導員をどんな人が担当しているのかという質問だが、スポーツ経験者、校長先生OB、恵庭市スポーツ協会OBの方となっている。効果については実技指導の部分での能力向上、教員の働き方改革、具体的には授業準備に割く時間が増えた等といった効果を確認している。

次に、文化系の部活動指導員の配置が進んでいるかという質問について、中学校全校に毎年度調査をしている中で、文化系の配置希望がないこともあり、現在はスポーツ系のみとなっ

ている。

事務局：最後に、部活動の地域移行について、こちらは地域移行の進め方や課題に関する意見、部活動地域で受け入れできる環境について意見をいただいた。
意見の中で、質問があった点を担当より回答する。

担当主査：まず受け入れできる環境を知りたいということについて、スポーツ系に関しては恵庭市スポーツ協会の少年団登録の一覧が挙げられる。複数の団体が登録しており、そちらで確保している。文化系については、社会教育団体というものがホームページに公開されている他、恵庭市文化協会に加盟している団体にて把握している。

ただ、両者にも属していない団体、例えば HIPHOP ダンスの団体や、個人によるパソコン教室等はまだ全て把握できていない現状である。そのような団体を知りたいということであれば、文化の部分も併せて、社会教育課を通して紹介することは可能なので、お問い合わせいただければと思う。

次に、保護者や中学生へ部活動の地域移行の現状を説明する予定があるかという質問について、説明会の開催は予定していないが、保護者や生徒を含む市民への周知は、今年の広報 6 月号において特集記事 4 ページに渡り実施した。

説明会については今年新たに協議会を立ち上げたため、そちらの中で意見も踏まえて検討していきたいと思っている。

最後に、地域スポーツ団体と関係のない人にどのように人材バンクに登録してもらうかという質問について、こちらは恵庭市スポーツ協会と連携して広報活動を展開している。市民が多く集まるイベントや、スポーツイベントの機会に、チラシ、パンフレットの配布等により周知することで、多くの人に登録してもらい、スポーツに関わりのない方にも関心を持っていただこうと思っている。

【質疑応答要旨】

G 委員：先ほど回答のあった、公表されている情報について、スポーツ協会の少年団登録と社会教育団体のほうでの情報ということであったが、例えば市のホームページの中で恵庭市内のスポーツまたは文化、習い事、などをピックアップするようなサイトや、SNS で情報公開するのは難しいのか。なかなかスポーツ協会のホームページを調べるという閃きが頭にはないと思う。そもそも少年団登録は少年団でないと登録できない。我々のようなスポーツクラブやクラブチームはここには載らない。そのため子供たちに情報を広げるということを見ると、さらに集約して見やすいものがあるといいのではないかと。

担当主査：対応の可否について、すぐにはお答えできないが、そういう意見があったということを経験で共有させていただき、対外的な周知というところを貴重なご意見とさせていただき検討していきたい。

F 委員：放課後活動についてだが、保護者としてはネットで検索するのが1番。私の周りでも、少年団にやりたい競技がない時はまずハイテク AC を検索し、やりたいものがマッチすればやってみるという流れが多いという風に感じている。

また、子どもがダンスをやっていたが、ダンス系はどこの団体にも属していない。少年団もなければ、スポーツ協会に登録しているところもほとんどない。ダンスの団体は市内にあるが、登録しているところは本当に限られている。社会教育関係に属しているところも限られ、ほとんどがどちらにも属してないので、市としては全くわからないことが多い。少年団とは作りがそもそも違うため、なかなか登録して周知に繋げていくというのは難しい状況にあるのかなと思う。

違うアプローチの方がいいのかもしれない。文化祭などのお祭りに出してもらい、連絡先をわかるようにする、SNS をわかるようにするといった方が、情報のキャッチとしてはいいのかもしれない。

5. 意見交換

①学力向上について

A 委員：ICT 教育の充実のところで、AI ドリルが出てきている。これについて、私も立場上調べており、全国学力・学習状況調査の結果における ICT の活用度と学力向上の相関はほとんど関係ないというデータが出ている。

つまり、報道等では ICT を使ったものと、いわゆる主体的、対話的で深い学びを行うことによって正答率が高い学校が多いというところから出てきた。

2 つ掛け合わせた内容であったため疑問に思い、ICT の部分と、主体的、対話的で深い学びの部分と分けて調べたが、ICT を使うことが学力の向上に繋がっているという相関はないという風に読み取れるデータになっている。逆に言うと主体的、対話的で深い学びと呼ばれるような、子どもたちが自分たちで獲得していくような学び方をしていると、正答率が高いということがまず出てきている。ということを考えた時に、ICT をどのように使っていくのかというところを再検討していかなければいけないと思う。

つまり、学力が上がるために ICT を使うという文脈ではなくて、あくまでも子どもたちの学習がどう拡張していくか、どう広がっていくかという文脈で使うほうが望ましいのだろうなということを、意見として参考までにお伝えしておく。

ちなみに、AI ドリルにおける児童生徒のつまずきの把握の部分に関して、例えば小学校の先生方は筆算のつまずき方について、補助数字の書く場所が間違えているだとか、細かい計算の過程、その辺りまで見取りながら指導するわけだが、残念ながら現段階の AI ドリルに関しては、そこまでの調査、把握はできていない。

割り算の問題で、タブレット学習では解けるのに、なぜかプリントになると解けなくなるという意見もあるが、こういうところにもそういった傾向が出てきていると思う。このご意見は非常に私も大事なところだと感じている。

ICT を使っていくときに学力に直結するということではなくて、子どもたちの可能性を広げるという文脈で捉えていくことは望ましいかなと思い、お話させていただいた。

D委員：AI ドリルについて、授業の終わりや確認時に AI ドリルを使って、子どもたちがスピーディーにやれるというのは1つ特徴だろうと思う。なぜかという、選択問題があるので、それをノートで計算したり、タブレットに書いて計算したりと、確認をするというところでドリルは非常に有効だと感じる。

併せて紙のドリルも取り組んでいるので、全て AI ドリルが学力に繋がらないかどうかというのは、なんとも言えないところ。ただ、どこでつまづいているのかは、先生がちゃんと巡視し、確認しないとわからないところもあるので、結果だけを追い求めるのではなく、やっている過程というのは非常に大切なことだと思う。

ICT を活用した授業について、学力と結びつくつかないかというよりも、どうやって子どもたちのメタ認知能力を高めていくか。その学び方の1つのツールとして、ICT の端末がある。もちろん学力も上がってほしいが、それよりも主体的に学ぶための活用のさせ方で、それにはやはり先生方が授業をイメージチェンジし、学びのやり方を変えていかなければならない。今、非常にどの地域も過渡期だと思うが、その中で先生方も苦戦しながら日々授業に取り組んでくれている。定着するまでには後2年、3年かかるかもしれないが、やっていることは間違っていないと思うため、そういうものを活用してやっていく世の中にどんどん進んでいくと思う。ただ、学力とどのように結びついているかというのは別だが、メタ認知能力を高めれば、必ずそういう意識が高くなっていくのは間違いないと思っている。

C委員：AI ドリルは家庭学習でも活用できる。それから、丸付けをしなくても回答欄が全て出てきて、どこでつまづいたかを早急に確認することができ、授業中でも確認することができる。AI ドリルをやることによって自分の間違いに自ら気付くという形もあると思っている。私たちは引き出しと言っているが、引き出しを多くしようということで、勉強の手段として AI ドリル、教科書、他に自分たちの選んだもので取り組みを進めている。その子によって個別最適な学び方があると思うので、学校ではその引き出しを多くしてあげようと AI ドリルに取り組んでいる。

毎日の持ち帰りがまだ出来ていないので、来年度は必ず毎日持ち帰って取り組むように進めていきたい。本校 ICT はかなり活用しているが、自分の考えを書き出し、考えをまとめて、いくつの考えがあるかという中で、試行錯誤しみんなで話し合っていくという場面が

多くあるが、前は黒板に書いて1つずつやっていたものが、手元のタブレットで全て分かって、この子の考えと自分は同じだな。という風に早く時間の中でセレクトすることができる。今は座って授業するのではなく、立ちあがり、自分のタブレットを持ってそこに行き、これどういう意味なの。と聞きに行く時間もある。みんなの前で発表する時間、個別で勉強する時間、グループで解決する時間ということに適しているツールだなと思っている。あくまでも、引き出しの1つであり、無くてもできるが、今小学校は色々な引き出しを用意してあげて、将来役立つ力を身につけさせてあげべきだという風に考えている。そのためICTがベストだとは思っていない。全ての体験をさせていただけるということで取り組んでいる。

今までの図工では作品を見合う時間が最後の作品提示のときであったが、今は1時間ごとにタブレットで撮影し、今日はこういうところに気を付けてやりました。と記録していく。4時間抜いたと4枚の写真ができるため、それをみんながアップロードし、誰のでも見られるようになっている。作品の写真を見たら、これはどうやって作ったのかなとその子の写真をクリックするとその制作過程が見えるようになっている。本当に凄い取り組みだと感じた。

F委員：子どもたちの参観日を見に行っても、本当に主体的、対話的で深い学びというところに先生方の努力が凄く見え、自身が受けていた授業とは全然違う形で繰り広げられていると感じた。この主な取り組みの記載に、主体的、対話的、深い学びというのが次年度から文言として別覧で入ると、少し違ってくるのかなというのが1つ思ったところ。今、学習指導要領も変わり、かなり主体的、対話的で深い学びというところが色々出てくる中でここには一言も出てきていない。どこかに入れて、検討すべき1つになるのではないかと思う。

担当主査：学習指導要領が改訂され、文言が非常にクローズアップされて、どの学習においても主体的、対話的、深い学びというのを大事にしていくというところを取り上げられている。教育委員会としてはこれが当たり前になっており、今委員の方からそういった意見をいただいて、確かに一般の方から見た時にそういった目線で学習に取り組んでいる、教育に取り組んでいるということは分かりづらかったなと感じた。そういった文言は今後資料の中でも取り入れて示していきたいと思う。

A委員：今まさに後期に入ってから、アシスタントティーチャーという形で、恵庭市教育委員会と連携し、文教大学の3年生、4年生が1週間に1回ないし2回、各学校に配属させてもらい、学習支援とゼミ活動等をセットで行っている。このことについては、私がここに着任する以前から取り組まれており、長いこと取り組みが行われている。ではこれをどう拡大するかということになった場合、可能と言えば可能かとは思いますが、その

時に考えなくてはならないこととして、1つ目は学生の移動の問題がある。札幌から来る学生も多々いるため、なるべく近く歩いていけるところ、自家用車を持っている学生については少し遠いところをお願いしながら進めている。

2つ目は、時間割について。昨今の学生は時間割がかなり詰まっている状況である。

本学の学生は、保育園・幼稚園・小学校や、幼稚園・特別支援・小学校というように、複数免許を取得することもあり、非常に時間割が詰まっている。その中で、どのように行けるかというところがある。学校側が来てほしいという風に思っているのか、それともそうでもないという風になっているのか、受け入れる側の、ある種支援で入りながらも、やはり意思疎通をしていかないと前に進まないのがこの教育活動なのは重々承知している。学生の経験値のためだけに行かせるものではないかなという風に思っているのも、その辺りも検討しながらになると思う。ただ、実績としては今アシスタントティーチャーという形でずっと取り組ませていただいている部分や、あるいは学生のいくつかのサークルの中で学習支援という形で進めているという現状である。

C委員：今ちょうどアシスタントで入っていただいているところで、昨日から1週間に1回行っている。午後から授業なので帰らないといけない、給食は食べられないと言って帰っていく姿を見ると、もう少し長く置いてあげたいと思う。私たちは将来の仲間を育てるという風に思っているのも、いい経験を積んで失敗もしてほしいということは、アシスタントティーチャーの学生たちに話している。良い体験だけではなく、嫌な部分も見て、そして乗り越え、同じメンバーになってくれたら嬉しいと言うと、頑張ります。という風に話してくれる。放課後学習も来てくれているので、中々時間が合わずに1人だけということもあるので、もしゼミで一緒にやってくれる子がいたら、何人以上は必ず確保できるとかにすると、学校の方もやりやすいように思う。うちの学校の放課後学習のあり方についても、今検討しているところで、もし学生が何人以上来るよという風になると、またやり方も変えていこうかなと思っている。学生に来ていただいた時に、模擬授業などの体験もさせてあげられる。例えば、今は1年生と3年生が放課後学習残っていいとしているが、大体、5、60人残る。その中で1人、2人の退職人材の先生と学生で見ていただいているが、学生が来ていただいた時に保護者の方が希望しているのは、今やっている算数の授業をもう一度教えてほしいということ。模擬授業のような形でさせてあげて、その中で勉強させてあげるなどの機会も作ることはできるかなと学校の中で考えているところ。

B委員：子どもも学年が上がり、算数がちょっとわからないと言い出している。家族で教えたりはするが、毎日ではないので、わからないと思った時にすぐ聞ける場所があったらいいなと思っている。子どもだから、年の近いお兄さんお姉さんの方が心を開きやすいと思うし、気軽に聞きに行けたりもするかなと思うので、そういう場を設けてもらえるのであ

れば大変ありがたい。

委員長：私が教員をしていた時に、アシスタントティーチャーを直接受け入れた経験はないが、その後教育委員会で勤めた時に、校長先生をやっていた方などは、絶大に褒めていた。私も少し文教大の学生の授業に関わらせていただいたことがあるが、やはり小学校の教員などを目指している学生は本当に意識が高い。アシスタントティーチャーに行きながら実際に学校の教員を目指している学生というのは、本当に姿勢が素晴らしく、目標をきっちり持てている。ただ、今言ったように、移動の問題や、時間割の問題について、なにかいい方法を見つけ出し、拡大していくのは恵庭市の子どものために必要なのではないかと感じところ。

②体力向上について

C委員：ハイテクACの指導には本当に感謝の気持ちでいっぱい。体育専門の先生も学校にいますが、その先生方も一緒に学ぶことができるということで大変喜んでいる。体育委員会で、学んだことや走り方のポイントなどを学校中に掲示したりして、子どもたちの学びも深まっていると感じている。プールについては、授業でセントラル（セントラルフィットネスクラブ恵み野）に行かせていただくと、特に夏にこだわらず、冬の期間でもいいなという話がこの間出てきた。そうすると、長期間にわたって水泳を教えていただくことができるという話題が校内で上がった。ハイテクACの走り方指導についても、運動会前だけでなく、他の時でもいいなという話は出ている。

G委員：運動会前だけに凝縮し指導している現状ではあるが、学習的に言うと、学校は行事があるので、みんな同じ時期に問い合わせが来る（5月頃）。人の数と学校の数を見ると運動会の日をずらすのではなく、うまく分散できないかなと思うところである。例えば3月からやっていくなど。それこそセントラルも言われていたが、プールも別に夏じゃなくて冬に行えないかと。そうすると授業も上手く分けられるし、夏にしかできない鉄棒など、屋外でしかできないものはなるべく寒くなる前に終わらせ、跳箱など屋内でできるものを冬に行うといった形でうまくできればいいなと思うところ。ただ、雲梯から落ち事故などもあり、力の劣りをすごく感じる。体育授業に行くときに、なるべく短いウォーミングアップの中で指示するとか、遊ぶ要素の中で何かするというのがちょっとでもできないかなと思い、今少しずつ増やしている。

端末ではYouTubeのように動画があったり、お家トレーニングのようなものがあれば引き出しの部分を増やしていけるのかなと思う。

対話するということも、できていない部分が見受けられる。やはり人と関わるという部分と、自分と向き合ってやるという部分のバランスがないといけなと感じる。黙々

と自分で考えることはできるが、それを人に伝えることができなかつたりする。黙々と自分でやることができるということは、自主活動、自主学習の能力は高いなと思う。でも、それで終わるのではなく、次のことを考え、そこから子どもたちがピックアップできるような形ができればいいと思う。先ほども端末の話聞いて、端末の活用もいいのかなと感じた。

正直に言うと、運動会前にやるよりは、その前に指導して自主練習してくれた方が速くなるのは当たり前なので、そういうことも踏まえて考えようかなと思って取り組んでいる。

C委員：「体育ノ介」という動画があり、それはよく見て参考にしている。

それを授業で活用し、大きいテレビに映して、ポイントを確認する。その後、体育にもタブレットを持っていくので、自分を撮影し、それを全員で見て振り返りを行っている。最後、そのグループでは今日どうだったのかという反省、振り返りをタブレットに入力するというのを1年生もこの間授業で公開した。自分の動きを友達に撮ってもらい、お互いに改善点を話し合うこともしている。ただ、タブレットを持ってハイテクACに行けるかどうかとなると、ネットワーク環境の問題などもあるかなと思う。

G委員：YouTubeが今すごい。しかし保護者の方も、何を見せたらいいのかわからない状況がある。クラブのサッカーの子たちは、オープンチャットを作って、そこに指導者の動きをどんどんアップしていき、これを家でやるときの参考にというようにしている。そういう取組を、体育の自主学習というか、簡易的なトレーニングとしてあっても面白い。

F委員：昔、娘の体育の授業見た時、それこそ「体育ノ介」の動画でマット運動を見た。実は健康運動指導士として、自分も運動指導をやっていたが、「体育ノ介」で開脚後転を見て、子どもたちがやるのは正直危険だなと思った。子どもの体力向上プロジェクトという取組にずっと関わらせてもらい、未就学の子どものたちの運動も見ていたが、やはり鉄棒とマットはここ10年で、劇的に子どもたちは出来ていない。雲梯で小学生が落ちることがあるのも不思議ではないと思うくらい、今の子どもたちはぶら下がることができない。この間、危ないので鉄棒は触らせたことがないと小学1年生のお母さんに言われたが本当に衝撃であった。保護者がやらせないで、小さい時からぶら下がってなければ、体が大きくなってから、小学校になってから、逆上がりをやりましようと言ってもできないのは当たり前で、前回りが怖くて泣いてしまう子がいるのも当たり前だなという風に感じている。

私は鉄棒やマット運動こそ専門指導が入ってもらった方がいいのではないかと正直思うし、かけっこに関しては、冬の間これをやったら速くなるよ。という動画を作っていたいき、各々自主トレのようにやった方が効果は上がりそうな気がする。運動会寸前の指導よりも、基礎体力を上げるような指導など、全体的な底上げがあると、先生方の指導力

アップにも繋がると思う。先生方から見た教育面での部分と競技に繋がる部分はやはり違うところもあるので、競技力をあげるという面から見てもこういった指導も入れると怪我なく学校生活を過ごせるのではないかな。体育に縛られるのではなく、部活動も今後その子が生涯にわたって楽しめるスポーツに出会うきっかけになるかもしれないので、もちろん競技をやっていく上で怪我はつきものだが、長い目で見ても安全に過ごしていく、予想してない怪我や、怪我の予防も加味して指導を続けていくというのは視野に入れて、ハイテクACに入ってもらうのが大事だと思った。

C委員：「体育ノ介」が危ないという話もあったが、それまでに1年生から6年生までのカリキュラムがあり、鉄棒もどこで何をするかと実は決まっている。学校で教育課程をきちんと整理していく必要がある。学年が変わりできる子が増えると、少し背伸びしてしまうこともあるので、そこは学校の課題である。

「体育ノ介」に関しては、ちょうど見ていただいた場面でそう感じたのだと思うが、ウォーミングアップや、その前の時間にどんなトレーニングをしたかというところが見えなかったのかなと思う。どんな取組をしているのかを皆さんに発信するということはとても重要なことなので、これからもっと発信していきたい。

D委員：この10年で体育授業がすごく変わってきていて、先生方も今まで教えた通りに教えても駄目だなとすごく感じる。この間、廊下で転んで顔を打った子がいたが、普通であれば手が出るところ、手が出なかった。雲梯で怪我をしてしまうことについても、落ち方でも変わってくると思う。受け身の取り方といったことも考えていかなければならないと思った。鉄棒についても、小学校1年生で入ってきた時からすごく差がある。ぶら下がれない子もいる、前回りも逆上がりもできる子もいる。学校の指導となると、先生方も難しいところである。その辺り、小さい時からの色々な体験、幼稚園、保育園の時点で既に差があって、小学校の体育という限られた時間の中で色々なことさせようとすると、中々能力が身につかないまま、進んでいってしまうので、専門的な指導をしていただけたらすると、非常にありがたいなと思うところである。

C委員：市内にはヨコミネ式を取り入れている幼稚園などもあり、そういった取組で逆立ちも跳び箱も逆上がりも成果がだいぶ違う。全くやってきてない子と本当に差が開いてしまうので、小学校の指導は今かなり難しくなっている。

委員長：最後にE委員、これまでのご意見を踏まえ、まとめをお願いしたい。

E委員：個人的に凄く参考になる会議だった。冒頭、A委員のお話については、まさにその通りだと感じた。統計の方は詳しくわからないが、5、6年前からGIGAスクール構想が学校に入り、その頃しきりに言われたのが、とにかく端末を触らせようということ。まだ試行錯誤の中で学校の取組も見てきたが、ここ何年かで物凄い進歩をしたと思

う。しかし、学校現場で気を付けなければならないとされていることは、使えばいいということではなくて、目的と成果、そこを見込んだものになっているかということ。対話も同じで、話し合わせればいいということではなく、話し合う必要があることなのかどうか、子どもたちにそれを感じさせた上でやっているかどうかということ。

長く教育に関わってきた立場からすると、時々不思議な世の中を見ているような感覚でいる。どこへ行っても人々がスマホを離さない、たまに電車に乗ると、スマホを見ていない人を探すほうが難しい。若い人だけでなく、街中歩いていてもとにかくスマホから目が離れない。世の中で働いておられる方はタブレットをずっと持ち歩いており、説明の際にはすぐにタブレットを出す。そういった時代になっている。A 委員が言われたように、ICT 端末を使うことが成果ということではなくて、使わせ方が大事であり、学校だけが頑固に黒板とチョークで行うというわけにはいかない。そういう流れの中で段々と洗練されてきているとはいえ、まだ広い視野から見ると試行錯誤の時代だと感じる。学校はものすごい努力をしており、比較的年齢の高い先生方はどちらかといえば端末に触りたくないという先生方もいらっしゃるにも関わらず、研修を重ね、かなりの先生方が使えるようになっている。

運動面で言うと、子どもたちは小さい頃に沢山遊んで、ある程度のことは自然と身につけてくるものだったが、今は習わないと身につかないのかなという風にも感じた。そういう意味で言うと、今日すごく思ったのは、私たちが住んでいる恵庭市は、子どもたちを地域ぐるみで育てるぞという姿勢がすごく感じられた。

学校は文教大の学生をととても頼りにしている。学校運営協議会が始まった時も、放課後学習をどうするのかと言った時に、すぐ文教大の学生を頼りにした。アシスタントティーチャーも含め、学生側もメリットを感じてくれていれば嬉しい。

文教大との協定の中で、高校生も含め、昔からの教育資源（人的、物的）の活用がよく言われている。

その中で随分と手が広がってきて、いろんな関係が結ばれている。こういうシステム作りがこの会をコアとして広がっていくといいなと思った。これから先の道筋が随分見えたような気がした。

6. 次回の会議日程について

教育総務課長より、次の内容について説明

【説明要旨】

次回の第3回会議は、2月頃開催予定。何日か候補日を設けた上で委員の皆様には出欠の確認をさせていただきたい。日程が決まり次第、案内する。

3回目については今年度取り組み、今年度の実績、来年度予定している施策を示してご意見をいただきたい。

7. 閉会